

豊岡市障害者自立支援協議会せいかつ部会 報告
令和6年度の取り組み

部会長：増田 浩平（NPO 法人でかけ隊）
池田 美和子（豊岡市社会福祉協議会）
谷 友紀子（生活支援センターほおずき）
中奥 みゆき（生活支援センターほおずき）
畑中 由希子（相談スペース ポッシュ）
福井 真悠子（とよおか福祉会）
梶原 博和（社会福祉課）
松岡 宏幸（社会福祉課）
中村 宏子（そらのおと）
古谷 栄美子（但馬訪問看護相談支援事業所）
金海 太一（出石精和園）
久田 成人（すきっぷ）
谷口 佳子（サポートきぼう）
狩野 明香（日高共同作業所）
西池 深音（豊岡市社会福祉協議会）
小谷 弘幸（北但広域療育センター）
木村 尚子（の〜ら）
川崎 彩（高年介護課）

昨年度から課題にあがっていた「成年後見制度について」に加え、「グループホームから一人暮らしに移行するための課題抽出、解決方法」を探してきた。

それぞれをプロジェクトチームにしつつ、全体で共有しながら活動した。

① 成年後見プロジェクトチーム

市内における後見人の課題について会議を重ね、メンバー内の意見を抽出。さらに広い意見を伺う必要があると考え、アンケートを行うことにした。まず市内の相談支援専門員にアンケートを行い、後見人や権利擁護についての認知度や、必要性を調べた。30件の回答を得ることができ、相談支援専門員の多くが困っている事案を抱えていることがわかった。

アンケートからは、「金銭管理や申請」、「契約行為」に困っていることが多く、「後見人が必要と思ったことや言われたことがある」と答えた人は85%以上だった。その中で「成年後見制度について検討した」のは82%に及ぶも、「後見人の手続きをしなかった人」が75%を占めた。理由としては「本人や家族からの同意が得られなかった」「金銭面で難しかった」「問題が解決すると思えなかった」などが挙げられていた。成年後見制度に関する研修があれば参加したいかという問いに対しては全ての人が参加したいと回答があった。

又、困っているケースの具体的な内容も聞き取ったところ様々な意見が寄せられた。特に「問

題が解決すると思わなかった」との回答を受け、メンバーで協議。現在の社会資源では解決に向かないことが多いという意見が出た。そこで、解決方法をフローチャート化する活動を行っている。その中から、現在の社会資源では解決できない問題を洗い出し、後見人・権利擁護センターに期待する役割を抽出していきたい。

今年度の成果としては、金銭面と医療同意についてのフローチャートを作成することができた。又、後見人・権利擁護センターに期待する役割としては、「成年後見制度への理解を促すこと」や、「様々な機関のコーディネート機能」、「意思決定支援会議の招集」なども期待したいとの意見が出た。「医療同意について」の中で本人の意思とニーズの乖離があり、支援者との意識に違いが起きてしまっている際に、支援者が医療同意を行うリスクについても話し合われ、意思決定支援会議の重要性と必要性は早急に解決する問題ではないかとの意見を受け、後見人・権利擁護センターだけではなく、個別支援会議やケースカンファレンスにおいて、本人と支援者の意思決定におけるコンセンサスを作る必要があるという意見が出た。

今後はフローチャートをホームページに掲載するなどの活用方法を検討し、来年度は啓発に向けたシンポジウムの開催なども検討していきたい。その上で、成年後見制度を充実させるためのセンターやそのセンター機能について提言をまとめていきたい。

② 一人暮らしプロジェクトチーム

<下半期報告>

入所施設からの地域移行が推進される中、グループホームのニーズが増えていくことが想定されている。居住の場としての機能を維持しつつも、一人暮らしを可能にする支援を充実させることで、一人暮らしの力をつけた人がより自分らしい生活を叶えるような仕組みが必要である。しかしグループホームと一人暮らしの生活のギャップは大きく支援が進んでいないのが現状である。

プロジェクトチームではこの問題を解決するために、短期間一人暮らしを試せる場（一人暮らしおためしハウス<仮称>）を作ることを検討してきた。

下半期は、現状及び課題把握のため支援者（相談支援専門員、グループホーム職員）を参集し、「一人暮らしの可能性を探ろう！交流会」を開催（R6/10/30）、プロジェクトチームが考える「おためしハウス」構想に対する意見や望ましいあり方など話し合っていた。さらに、参加された支援者の協力を得て、一人暮らしをする力があると見込める方や一人暮らしを希望している方（主にグループホーム利用者）を対象に、一人暮らしについて感じている不安・困りごとについてアンケートを実施した。

その結果、金銭面、食事・服薬・家事等の日常生活、移動手段などの課題が見え、一人暮らしを体験する場があれば「利用したい（してもらいたい）」という思いは、当事者・支援者問わずかなりあった。

一人暮らしの体験自体は、民間のウィークリーマンションのような場で可能ではあるが、主な収入が障害年金である人にとっては金銭的負担が大きすぎ現実的ではない。グループホームに籍

をおきながら体験を可能とするためには、なるべく家賃負担が少ない住居の確保が必要で、民間、市営・県営の住宅を含めて検討する必要があると考えている。また、一人暮らし体験の場のみならず、虐待問題ケースがあった場合の一時的な避難場所としても活用できるような仕組みづくりが必要であり、地域生活支援拠点整備の観点からも大変重要だと思われる。

さらに、「おためしハウス」でも必要に応じて居宅介護サービス（ヘルパー）も利用できるようにするなど柔軟な運用も求められる。

こうした豊岡市独自の仕組みができることで、グループホームが自立支援加算の対象となる支援（利用者の希望に基づきアセスメントを行い、一人暮らしに向けた個別支援計画をたてる等）を積極的に行い、グループホームから一人暮らしへの移行が進んでいく。ひいては、その流れが入所施設からグループホームへの地域移行を促進することにもなると考えられる。

当プロジェクトチームでは、「おためしハウス」を実現すること、それを利用者のために有効に活用するグループホームや相談支援等が支援チームとして協力し合い、より質の高い支援が可能となる仕組みについて豊岡市への提言として今年度中にまとめる予定である。

なお、10月末に実施した「交流会」において、普段集まって意見交換をする機会のないグループホーム関係者より『このような集まりが定期的に行われると嬉しい』との声があげられ、1月29日にも第2回目を開催した。来年度より各グループホームにおいて義務化される地域連携推進会議について意見交換がなされた。今後、この会の持ち方については検討が必要などころである。

二つのプロジェクトチームによって、グループホームから一人暮らしをする体験ができるようになり、一人暮らしをする人が増え、権利擁護や意思決定支援を受け、どんな人であっても安心して自分の思う生活をする事ができる市にできると考えられる。